

## V Ignatian Leadership

李 聖 一

### はじめに

ここ数年、世界各地のイエズス会において、“Ignatian Leadership”に関する研修会が盛んに行われています。主な対象は、“superior”と呼ばれる「長上」で、新任の管区長や管区長代理、“local superior”と呼ばれる「支部長上」です。最近では、比較的若いイエズス会員を対象に行われることも多いし、さらには、イエズス会の学校で学ぶ学生・生徒を対象に行われています。内容は、どの研修会も同じようなもので、イエズス会の創立者ロヨラの聖イグナチオの生涯と霊性、それを基にしたイエズス会の霊性を解説し、現代社会におけるイエズス会のミッション、イエズス会内における現実生活の諸問題、現代社会からのチャレンジなどを考察していきながら、Leadershipのあり方を考えるというものです。

私自身、3年前に、ソウルで行われたAsia Pacific（アジア太平洋地域の管区連合体）の研修会に参加したことがありました。

なぜ、今、“Ignatian Leadership”なのか。この研修会に参加するまでの私の基本的な問いでした。イエズス会に入会してすでに40年。校長や院長（支部長上）を経験してきた私にとって、今更、何がリーダーシップかという思いもあり、この研修会に参加することにあまり乗り気ではありませんでした。

しかし、研修プログラムを消化していくうち、次第次第に事柄の重要さに気づいていくようになりました。ケース・スタディもあり、それほど大したケースでもないと思うようなものもありましたが、今日の社会的な現実のなかにおかれているイエズス会員とその共同生活の諸問題は、いわゆる「長上」

としての役割を果たす上で、いろいろな困難さがあるということはよく理解できたし、こうした諸問題にイエズス会の霊性という視点をもって対処していくということはなかなか容易なことではありません。そうしたことに気がつくのと、リーダーシップというものの大切さを痛感せざるを得なくなり、では、“Ignatian Leadership”とは何かと改めて問うことになったのです。

よくよく考えてみると、このリーダーシップという言葉が日本中にあふれていることにも気がつきます。電車通勤をしていて、ある駅に電車が停車すると、いろいろな広告の看板が目に入り、その中には、「次世代を担うリーダーシップを養成する」という文言がありました。何の看板なのかをチェックすると、ある学習塾のものでした。いろんな学校のパンフレットや経済誌にも登場します。「グローバル社会に貢献するリーダー」とか「混迷する社会にあって必要とされるリーダー」とか。政財界は言うに及ばず、教育界においてもどんな分野においても、「リーダー養成」は急務であるようです。

イエズス会においても同様なのでしょう。確かにそうかも知れません。会員数の減少にもかかわらず、イエズス会が抱えている事業は多くあります。高等教育機関、中等教育機関、教会司牧、霊的指導、社会司牧、環境問題に対する関心、グローバル社会に対応するための方策、そして、新たな必要に応えるミッションなどなど。そうしたものをやり遂げていくために必要とされるリーダーシップのあり様と養成は確かに必要であり急務なのです。そして、本物のリーダーシップが必要とされています。

私が参加した研修会の最後に、韓国管区からの参加者が声を大にして訴えました。この“Ignatian Leadership”の研修会は若いイエズス会員にこそ必要である。そして、イエズス会が携わる事業に関わるすべての人に必要である。特に韓国においてはそうだ。私たちの国には、今、本当のリーダーがいない。リーダーシップの養成は本当に必要なのである。ちょうど、セウォル号の事件があった年です。リーダー不在を嘆く声は痛切でした。韓国だけではありません。日本においても、本物のリーダーは不可欠です。

## “Ignatian Leadership”とは何か

一冊の注目すべき本があります。“HEROIC LEADERSHIP”という本です。著者は、Chris Lowney。副題に、“BEST PRACTICES FROM A 450-YEAR-OLD COMPANY THAT CHANGED THE WORLD”とあります。彼は、もとイエズス会員で哲学の勉学期までイエズス会にいました。その後退会し、J. P. Morganで働き、ニューヨークや東京、シンガポール、ロンドンで、マネージング・ディレクターとして活躍しました。現在は、カトリック・メディカル・ミッション理事会の顧問をしています。リーダーシップに関する数ある本の中でもベストセラーだそうです。

この本を読んで驚きました。内容はすべてイエズス会に関するものなのです。ロヨラの聖イグナチオの生涯、イエズス会創立に至るまでの歴史、創立後のイエズス会が受けてきたさまざまなチャレンジ、などなど。そして、これらの中に、今日学ぶべきリーダーシップのすべてがあると主張しています。かつて在籍したことのあるイエズス会に対する身びいきゆえのものなのか、と思わないわけでもないですが、それにしても、ビジネス社会の真只中に身を置いて活躍してきた経歴の持ち主です。単に身びいきだけではないでしょう。

聖イグナチオの生涯、彼が体験して学んだこと、それに基づく霊性、こうしたことから学ぶリーダーシップを“Ignatian Leadership”と言います。それはどのようなもののでしょうか。Chris Lowneyの本をなぞるまでもなく、聖イグナチオの生涯と霊性、イエズス会創立のさまざまな出来事を知れば、そこから“Ignatian Leadership”とは何かが見えてくると思います。

ここで聖イグナチオの生涯をたどる余裕はありません。すでに彼の口述筆記による自叙伝や伝記は日本でも読めます。彼の霊的体験から生まれた『霊操』も手に入れることはできます。これらを周知の上で、私は、彼の霊性を特徴づける言葉を解説しながら、“Ignatian Leadership”について述べてみます。

“Ignatian Leadership” とは何かを特徴づける言葉は、以下の通りです。

- ① “discernment” (識別)
- ② “discreta carita” (分別ある愛)
- ③ “indifferentia” (不偏心)
- ④ “agere conetra” (反対のことをする)
- ⑤ “eliciting the great desire” (より大いなる望みを引き出す)
- ⑥ “cura personalis” (ひとりひとりへの配慮)
- ⑦ “cura apostolica” (使徒職に対する配慮)

① “discernment” (識別)

「識別」というのは、聖イグナチオの靈性を表す最も特徴的な言葉であり、かつ中心となるものです。

聖イグナチオが自らの靈的な体験をもとに祈りの方法としてまとめた書物を『靈操』と言います。体の健康のために行うことを「体操」と言いますが、心を整えるために行うのが「靈操」です。祈りには、カトリック教会がその歴史の中で培ってきたさまざまな方法があります。「口禱」といえば口に出して祈ること、「念禱」といえば心の中で念ずること、「黙想」は福音書に語られたイエスの言葉を静かに考えること、「観想」は想像力を使ってイエスの姿を思い浮かべること、などなど。そのような伝統的な祈りを各段階に分けて行っています。カトリック教会の伝統的な神秘主義には、神に至る道として、「浄めの道」「照らしの道」「一致の道」を経るといっていますが、聖イグナチオの靈操も基本的にこの三つの道をたどります。靈操では、「週」として分けられ、第一週から第四週まであります。およそ30日をかけて、この道を歩んでいくのですが、イエズス会に入会すれば、生涯において少なくとも二度、これを行い、年毎に、30日を8日間にまとめた靈操を行います。

この靈操において大切なことは、何らかの靈的な知識を得たり、イエスの言葉を深く理解したり、いわゆる「悟り」を開くようなことではありません。聖イグナチオが大切にしたのは、「心の動きを知る」ということでした。

彼は次のように言っています。「靈操を与える人は慰めとか、荒みのような靈的な動きが靈操者の心に少しも現れず、種々の靈に動かされてもいないとわかったときは、靈操者に決まった時間に靈操をしているかどうか、またどのようにしているかをよく尋ねてみなければならぬ」(靈操6)。

「靈的な動き」「種々の靈」という言葉に注意しなければなりません。このことについては、「靈の識別の規定」で詳しく説明されています。たとえば次のような説明があります。

第一則 大罪に大罪を重ねている人の場合、さらにその悪徳と罪を続けさせ増大させるため、敵は快樂を目の前に浮かべさせ、感覚的な楽しみや快樂を想像させるのが常である。同じ人の場合、善靈は反対に善悪の判断を通して良心を刺し、呵責を感じさせるのである。(同314)

第二則 ひたすら罪を浄めようとし、わが主なる神への奉仕の道にますます進んでいる人の場合、事情は第一則と逆になる。その場合、悪靈の特徴は、人をさいなみ、悲しませ、妨げをおいたりして進歩しないように、根柢のない理屈で心を乱すことである。他方、善靈の特徴は人を励まし、力、慰めと涙、靈感と安らぎを与えたりして、善行の道に一層進歩できるよう万事を易しくし、あらゆる妨げを取り除くことである」。(同315)

靈操を行う自分の心の状態をこうして知ることが大切なのです。「種々の靈」というとき、それは主に「善靈」と「悪靈」のことを指します。「善靈」とは「神から来る靈」であり、「悪靈」とは「神に反する靈」です。そして、「善靈」はつねに「靈的な慰め」を与えます。「靈的な慰め」とは、「靈魂のうちに内的な動きが引き起こされ、それで靈魂が創造主への愛に燃え上がる」状態をいい、「主への愛に駆り立てる涙を流すとき」「創造主のうちに靈魂に静けさと平和を与え、天上のものと自分の救霊へと呼び寄せるあらゆる希望・信仰・愛徳の増大、あらゆる内的喜び」を慰めと言います(同316)。逆に「靈的荒み」とは、「靈的な暗さと乱れ、卑しく現世的なものへの動き、

不信へと駆り立てる種々の乱れや誘惑からの不安、希望も愛もなく、靈魂がすっかりものうく、なまぬるく、もの悲しくなってしまう、創造主から切り離されたように感じる」ことです（同317）。

こうした心の動きは、靈操をしているとき以外にも、日常的に体験していることがあります。「元気が出てきた」「新たな希望に燃えてきた」「深く愛することで涙が流れた」「力がわいてきた」など、誰もが体験したことがあるでしょう。逆に、「不安に駆られてどうしようもない」「元気がなくなった」「すべてがむなしく思える」「何の力もわいてこない」といったことも体験します。

このような心の状態にあるとき、なぜなのか、どうしてこうなったのかを知る事が「識別する」ということなのです。とすれば、日常生活の中であって、私たちが体験するさまざまな事柄、そこから生じる種々の思い、それらがどこから来たのかを知るということは、何かをなすときに、大いに助けとなります。ある事柄に元気に立ち向かっていけるのか、不安に駆られて何も手がつかないのか、ものうくなって何も決断できなくなってしまうのか、そうした状態を見極めることは大切です。リーダーたるものがそうした心の状態を知ることなく、何かをなす、あるいは何もしないということになれば、その人に導かれる集団はどうなってしまうのでしょうか。リーダーの資質として、「識別する」ということの大切さは誰でも理解できるでしょう。聖イグナチオの靈性から学ぶリーダーシップの第一のものがこれです。

## ② “discreta caritas”（分別ある愛）

これも「識別」と関連することです。聖イグナチオはイエズス会初代の総長になったときから、新たに設立されたイエズス会における修道生活のあり方を定めなければなりません。その規定を「会憲」と言います。イエズス会への入会を志す者に対して、どのような質問をするか、どのような資質をもつ者を入会させるか、ふさわしくない者をどのようにして退会させるか、受け入れられた者に対してどのような修練を行うか、何をどのように勉強させるか、イエズス会への入会を正式に認めた場合、どこにどのような人

物を派遣するか、イエズス会における修道生活の特徴は何か、どのような資質を備えた会員を長上にするか、会そのものの維持発展のために必要なことは何か、そして、会員の死にあたってどんなことに留意すべきか、などなど仔細に定めています。10部827条からなる「会憲」は、その後の他の修道会が生活様式を定める上で、大きな影響を与えました。その「会憲」の中で聖イグナチオが好んで使った言葉が“disceta caritas”です。

これは、「愛」を動機とするがゆえに、何でも無条件にその「愛に動かされて」何事かをなすことを戒める言葉です。興味深いことに、聖イグナチオはこの言葉を、会員を退会させる場合とか、修練者に対して懲罰を与えるとか、苦行や断食といった修行を行うなど、微妙な事柄やよくよく気をつけなければならない事柄を扱うときに使います。たとえば、「退会させる権限を持つ長上は、分別に満ちた愛をもって、退会させるために十分な根拠となる理由を、わが主なる神の前で検討しなければならない」（会憲209）。「会員に科する懲戒や償いについてとるべき方法は、長上と長上から委託を受けた代理の分別ある愛に委ねられる」（同269）。「祈り、黙想、勉強、断食、睡眠を減らすことなどの修行や、苦行によって身体を鍛えることについては、分別に満ちた愛が勧める規則以外の規則を与える必要はない」（同582）。

「これはいかん。あってはならないことである」「責任の所在を明らかにせよ」「懲戒に値する」といった判断を怒りの心の状態でなすとすれば、とんでもないこととなります。その人にとってマイナスとなることは、その根拠を明確にしなければなりません。何か罰を与えるにしても、それ相応の理由がはっきりしていなければなりません。本人が納得するという形にまでもっていかなければならないということは言うまでもないことです。また同時に、事柄をうやむやにしたままで、何の決断もしないということになれば、それはそれで大きな問題となります。微妙な事柄であればあるほど慎重でなければなりません。このようなことにどう対処するかはリーダーとして試されるという一面ももっていると言えるでしょう。

### ③ “indifferentia” (不偏心)

これも聖イグナチオの霊性を特徴づける言葉です。“indifference”と英語にすれば「無関心」という訳になりますが、そういう意味ではありません。イエズス会では「偏らない心」と理解しています。

『靈操』の中に、「原理と基礎」という霊操全体を通奏低音のように響かせている箇所があります。その内容を静かに黙想する機会も与えられ、霊操研究者の中には、これが霊操の最も基礎的で重要なものと指摘する人もいます。少し長くなりますが、引用してみます。

人間が造られたのは、主なる神を賛美し、敬い、仕えるためであり、こうすることによって、自分の靈魂を救うためである。また、地上の他のものが造られたのは、人間のためであり、人間が造られた目的を達成する上で、人間の助けとなるためである。従って人間は、そのものが自分の目的に助けとなる限り、それを使用すべきであり、妨げとなる限り、それから離れるべきである。であるから、私たちの自由意志に任せられ、禁じられていないものであれば、すべての被造物に対して偏らない心を育てなければならない。従って、私たちの方からは、病気よりも健康を、貧しさよりも富を、不名誉よりも名誉を、短命よりも長寿などを欲することなく、ただ私たちが造られた目的へよりよく導いてくれるものだけを望み、選ぶべきである。(靈操23)

人間の造られた目的は何かを明確に定め、被造物、この場合は、ただ単に自然や世界を意味するだけではなく、人間を取り巻くすべてのものは、その目的を達成するために使われるべきで、それら自身を目的としてはならないということです。健康や富や長寿といった、人間ならば誰でも望むようなものであっても、それを目的とし、心が偏ってはならないということです。

本来の目的からブレてはならないということでしょう。あらゆるものを総動員して目的を達成する、しかし、そうならないとわかればそこから離れる。それがたとえ、自分の命であっても、それにとらわれてはならない。そ

こまで、根性がすわっていなければリーダーとは言えない。そう理解していないのではないのでしょうか。

### ④ “agere contra” (反対のことをする)

この言葉はときどき誤解されて使われることが多いです。「克己心」を養うために、自分の思うところと反対のことをせよ、と理解されることがあるのです。しかし、聖イグナチオはそのような意味では使っていません。これも霊操の中にある言葉で、識別との関連に由来するものです。

『靈操』の中に「二つの旗」という黙想のテーマがあります。かなり戦闘的なもので、イエスが掲げる旗とイエスに敵対するルシフェルが掲げる旗のもとで、戦う様子をイメージさせながら考察させる黙想です。「第一部」では、総司令官ルシフェルが悪魔たちを集め、富への欲望、この世の名誉、高慢に導いていく様子を眺めさせます。「第二部」では、総司令官イエスが、霊操者を心の貧しさ、実際の貧しさ、辱めと蔑みを望ませ、謙遜へと導く姿を黙想させます。なんだか、スマホのゲームになりそうな感じですが、この二つの真逆の場面を黙想させて、イエスの導きに応えたいと思うように、霊操者を導いていきます。

ここで興味深いのは、この黙想をさせるときに与えられる注意です。こう書いてあります。

次のことに注意してよい。私たちが実際の貧しさをいとい、反感や嫌気を感じる時、すなわち、貧しさや富に対して不偏心がないときには、その乱れた愛着を取り除くために(肉に反対しながらも)対話において次のことを主に願うのは、極めて役立つことである。すなわち、主が実際の貧しさに自分をお選び下さるようお願い、全善なる神への奉仕になりさえすれば、自分がその恵みを望み、嘆願し、こい願っていると主に申し上げるべきである。(靈操157)

ここで言う「肉に反対しながらも」というのが、“agere contra”なので

す。人間的な思いとして、こんなのいやだなあ、とか、それはしたくないなあと思うことは、誰にでもあります。そんなとき、そのような人間的な思いに対して、「あえて」「反対のことをする」ということです。

物事を進めていくとき、すべてが順風満帆でいくことはありません。ときに躓き、失敗し、うまくいかず、気分が萎えてしまうことがあります。もうやめるか、どうしようもないとあきらめたくくなります。そんなときこそ、あえて「反対のことをする」ということが生きてくるのです。これもリーダーの資質として大切なことです。うまくいかなくなったらやめるを繰り返していたのでは、どうにもなりません。逆境をこえて、耐えていくことは、うまくいかなくなるときに、絶対に必要なのです。

#### ⑤ “eliciting the great desire” (より大いなる望みを引き出す)

聖イグナチオの霊性を特徴づける言葉は「望み」であると言う人がいます。聖イグナチオは霊操者に対して、どんな霊操を行う場合でも、その前の準備として、「切に望んでいるものを主なる神に願うこと」と言っています(霊操48)。そして、「その願いは、内容に即し、復活の観想なら、喜びにあふれているキリストと共に喜びを願うことであり、受難なら、苦しめられているキリストと共に痛みと涙と苦悩を願うのである」と言っています(同48)。この指示は、すべての霊操の準備として行います。このように、「望む」というのは、確かに、霊操においては、大事なことなのです。

また、これもイエズス会を特徴づける言葉の一つですが、“magis”(よりもっと)というの、つねにより大いなるものを望み、目指すというダイナミックな動きを示す言葉です。聖イグナチオはつねに比較級を使って、よりいっそう進歩していくことを大切にしました。「神のより大いなる栄光のために」「Ad Maiorem Dei Gloriam」というイエズス会のモットーも比較級が使われています。祈りによる靈魂の進歩、勉強、ミッションの遂行、すべてが「よりもっと」「magis」の精神で行われるのです。

今日、「より大いなる望み」をもつことがむずかしい時代だと感じる人は多いようです。先行き不透明で、経済的にも不安定な時代だからでしょう。

また、何でもこれまで通りにやっていけばよいという時代ではないからこそ、むしろ、自分の望みが何であり、どこにあるのかを知ること知ろうとすることも少ないのかもしれない。

しかし、だからこそ、リーダーは仲間に対して、どんな望みがあるのか、何を望むのか、それを引き出す力が必要なのだと思います。こんな話があります。

学校を定年で退職したイエズス会員がいました。年をとったとはいえ、まだまだ働く力も元気もあります。しかし、長年学校で働いてきたこのイエズス会員は、学校以外での仕事をしたことがありません。いったいこれから何をしたらいいのか、悩んでいました。そんなとき、彼の長上は、宣教地の学校で働くことを提案したのでした。今までの経験を生かすことができる、しかも、教育が何よりも優先されなければならない地域でした。「あなたなら、今までの経験を生かし、そして大いに貢献できるのではないかと、長上は言ったのでした。この一言がひとりの老イエズス会員の心に火をつけた。新たな望みと勇気をもって、彼は、その宣教地にでかけたのです。

「より大いなる望みを引き出す」という一つの例だと思います。「望み」を抱くということがどれほど人を元気づけ、勇気づけるか、そのような望みを引き出すことができるリーダーはとても魅力的だと私は思います。

#### ⑥ “cura personalis” (一人ひとりへの配慮)

これは、イエズス会という修道会で本当に大切にされているのかと、いぶかる人がいます。というの、イエズス会は軍隊的な規律を課し、従順という誓願ゆえに、本人の思いを無視してでも、長上の命令には絶対的に服従する修道会であると思っている人がいるからです。

確かに、「会憲」は従順の誓願について次のように言っています。「すべての者が心をこめて従順を守り、従順について秀でる心構えをもたなければならない。義務づけられたことがらのみではなく、長上が命令を下さなくても、意思表示のみを示すことがらについても、従順でなければならない。神のために従順を果たす私たちは、わが創造主なる神を目の前に置き、恐れに

かられてではなく、愛の心をもって行動するよう努めなければならない」。そして、イエズス会の従順を特徴づける表現が続きます。「したがって、愛を伴う従順が及びうるあらゆることならにおいて、わが主キリストの口から発せられたかのように、従順を呼びかける声に従う準備をしなければならない。書き始めた文字や着手した仕事が終わらなくても、放置し、意向と力をことごとくすべての人の主に向けて、実行、意志、知性に関する聖なる従順が、常にあらゆる点において完全になるように努めなければならない。……また、従順のもとに生活している者は、どこに運ばれても、またどのように扱われても逆らわない屍のように、あるいはどこでも、いかなる場合にも、杖を手にする者の意のままに使用される高齢者の杖のように、目上を通して神の摂理に導かれ、治められることを念頭に置かなければならない。」(会憲547)

絶対的で盲目的な従順がイエズス会を特徴づけるということは、よく言われてきたことです。しかし、実は、この従順には、イエズス会独特の「良心報告」という習慣が先立っていることを忘れてはなりません。「良心報告」というのは、会員が自分の心うちにあることを長上に打ち明けるといことで、会員一人ひとりをよりよく知り、派遣する際に、長上は誰をどこに派遣するか、よりよい決定をするために大切にされてきたことでした。「会憲」は次のように述べています。「わが主において熟慮したうえで、長上が会員を徹底的に知ることは極めて重要であると、至高の神において考えている。長上が徹底的に会員を知っているならば、会員をよりよく統治し、世話をするとともに、彼らがさらにひたむきに主の道を進むように導くことができるからである。」(会憲91)

「さらに、長上が会員の内面と外面を知っているならば、それだけでも心をこめて会員を愛し、配慮して助け、将来起こりうる不都合や危険から彼らの靈魂を守ることができるであろう。私たちは、たてた誓願と本会の行動様式に従って、ローマ教皇、または直属の長上に命じられた時は、いかなる場合でも、将来、世界のどの国にでも赴く覚悟を持っていなければならない。それゆえ、派遣について誤ることがないように、すなわち送る人と送らない人、また各会員に責任を与えることについて誤りが生じないように、長上が

自らに任せられた会員の傾向や霊的な動き、また現在、過去を問わず、欠点や罪の傾向を徹底的に知っておくことは極めて重要であり、さらに不可欠である。」(会憲92)

リーダーがともに働く者の一人ひとりをよりよく知るのには、彼らを大切にするという配慮とともに、よりよい働きをその人に望み、実現させるために、大切だということは言うまでもないことです。

#### ⑦ “cura apostolica” (使徒職に対する配慮)

一人ひとりを大切にすると同時に、リーダーとしては、使徒職のこと、そしてその使徒職の母体となっている組織のことを考えなければなりません。使徒職というのは、イエズス会が運営している組織や共同体の仕事のことで、日本においては、大学や中学・高校の仕事を教育使徒職、教会の運営を教会使徒職、黙の家を霊的使徒職、社会問題に関するセンターの運営を社会的使徒職と言っています。

聖イグナチオは、イエズス会という組織の統治のあり方やその維持、存続の仕方についても気を配っていました。そしてそのためにこそ、『会憲』の作成に全力を傾けたのでした。次のように言っています。

会憲の目的は、神の栄光と全教会の善のために、本会全体と会員一人ひとりが会の維持と発展を助けることである。(会憲136)

そして、会憲第10部は、会の維持と発展のために必要なことがらを事細かに記していますが、聖イグナチオには一つの確信がありました。

本会は人間的な手段によって設立されたものではない。その保持と発展も人間的な手段によってではなく、わが主なる神キリストの全能の御手によってのみ、可能となる。したがって、主がご自身への奉仕と賛美のため、また靈魂を助けるために始められた本会を維持し、保持する希望を主のみに置かなければならない。この希望に応じるもっともふさわしい第一の手段は祈り

であり、この聖なる意向のために捧げるべきミサである。(会憲812)

組織の維持・発展については、これを託された者にとって、最も大きな関心事であることは言うまでもないことです。しかも、時代の転換期とか、新たな変革が求められるときに、自分に委ねられた組織、使徒職をどのように刷新させていくか、将来の展望を見据えた上で、何を変え、何を維持していくかを識別し、判断することは、リーダーにとって、極めて困難をとまなう課題となるに違いありません。それでも、それを成し遂げなければ、組織は廃れてしまい、消えて行くこととなります。リーダーに託された使命の最も大きなものがここにあると私は思っています。

## 終わりに

聖イグナチオの霊性を中心にして、“Ignatian Leadership” について、述べてみました。

他にも、彼が残した書簡などを通して、もっと詳しく語る必要はあると思いますが、これで終わりたいと思います。最後に、カトリック教会が大転換期を迎え、それに応じてイエズス会を刷新していくことに力を注いだ第28代総長ペドロ・アルベ神父についてふれてみたいと思います。

彼は、聖イグナチオと同じバスク地方の出身で、そのためか、風貌はよく似ています。医者になることを目指して医学校に進みますが、人の魂を癒すことを志すようになり、イエズス会に入会しました。そして、聖フランシスコ・ザビエルに憧れ、日本への宣教師になることを望み、1940年来日しました。山口・広島で宣教活動に従事し、特に太平洋戦争前後は広島市長東にあった修練院の修練長として日本のイエズス会員の養成に尽力しました。原爆が投下されたときは、みずから被爆しながらも、修練院の聖堂を急遽、救急治療の場に変え、医学の知識もあったので、応急手当に従事しました。ここを訪れて治療を受けた人は、誰一人亡くなった者がいないと言われてい

その後、原爆の惨状を訴え、戦争で悲惨な状況になった日本を再建するために、全世界を駆け回って、日本への宣教の必要性を説きました。その声に応え、多くの国々の若いイエズス会員が日本に渡来しました。

1965年、2000年の歴史をもつカトリック教会が大きな変革を遂げるきっかけとなった第二バチカン公会議が開催されるなか、イエズス会にも変革の必要性が叫ばれたとき、総長に選出されたのがアルベ神父でした。アルベ神父は、聖イグナチオの霊性の根本に立ち返り、イエズス会固有のミッションを現代において生きる方針を定めていきました。それは、イエズス会教育のあり方にも影響を与えました。今日、私たちは“Men for others”をイエズス会学校のマottoとしていますが、この言葉はまさに、アルベ神父が最初に用い、イエズス会学校の特徴として語ったものです。しかし、この言葉は誤解されることも多く、1973年にスペインのバレンシアで開催された全世界のイエズス会学校の卒業生の大会で講演したとき、話の最中に席を立てて出て行った卒業生もいたと言います。アルベ神父はこう問いかけたのでした。

まず、こう質問させてください。私たちイエズス会員は正義のために教育してきたでしょうか。あなたがたも私もよく知っています、あなたがたの先生であったイエズス会員の多くがこの質問にどう答えるかを。彼らは全き「真摯」さと謙虚さをもって、「私たちはそうしてこなかった」と答えることでしょうか。教会が今日、「正義」や「正義のための教育」といった言葉に賦与している意味のあらゆる深みを鑑みるなら、私たちは、あなたがたを、正義のために教育してはこなかったのです。

それまでのイエズス会学校の教育を否定するかのような話に耳を傾けることができない卒業生もいたのでしょうか。しかし、イエズス会は社会的な正義を追求し、それなしに信仰を広めることはできないという信念をもち始めたのでした。このことを示す言葉が“Men for others”なのです。それを受けて『イエズス会教育の特徴』は、次のように述べています。



イエズス会教育の伝統的な目標は「指導者」を養成することでした。その「指導者」とは、社会の中で責任ある地位を引き受けることによって他者により影響を与える人々を意味します。この目標は、ときには行き過ぎて修正しなければならないこともありました。かつてどのような誤解があったにせよ、現在理解されているイグナチオの世界観の中のイエズス会教育の目標は、社会的・経済的エリートを育てることではなく、社会に仕えるための指導者を育てることです。(『特徴』110)

アルベ神父は18年間、総長職にありましたが、1981年8月7日、フィリピン訪問を終えてローマに帰るとき、フィウミチーノ空港で脳血栓を引き起こし、一命は取りとめたものの、病床に就いたまま復帰することなく、1983年に総長を辞任しました。辞任が了承された後、全世界のイエズス会員に宛てた彼の最後の書簡は、会員の一人ひとりを気遣う内容でした。“tantas cosas…”(言いたいことはたくさんあるのですが…)というタイトルが後に付けられたメッセージで、養成中の会員、働き盛りの会員、年配の会員、そして年老いた会員に対して、温かい言葉を述べ、聖イグナチオの「自由を捧げる祈り」言葉で締めくくられています。

アルベ神父が示した“*Ignatian Leadership*”とは、上に立って命令をくだすというのではなく、また、誰かがリーダーで誰かが“*follower*”(従う者)でという形のものでありません。みずからを従わせることができ、他者に仕え、他者とともに歩むことができるリーダーの姿なのでした。

イエズス会学校で学ぶ者も教える者も、そして、管理職を委ねられた者も、“*Ignatian Leadership*”を身につけることは、今日、極めて大切です。それは、リーダーになるというよりは、人として生きる上で身につけなければならない人柄のようなものだと思うからです。

※ 文中の『靈操』からの引用は、「聖イグナチオ・デ・ロヨラ 靈操(改訂版)」(ホセ・ミゲル・バラ訳、新生社、1997年)、『会憲』からの引用は、「イエズス会会憲 付 会憲補足規定」(イエズス会日本管区編訳、南窓社、2011年)を使用しました。

“*tantas cosas...*”(言いたいことはたくさんあるのですが…)

—イエズス会総長ペドロ・アルベ神父の辞任メッセージ—

〈1983年9月7日〉

神父様方

私は、どんなにかもっと良い健康状態で皆様とともに、この会議に参加できたらと思います。御覧のように、皆様に直接語ることさえできません。しかし、私が皆様に申し上げたいことは、総補佐がわかってくれました。

私には以前にもまして今、自分自身が神の御手の中にあることがわかります。これは私が生涯、若い時から望んで来たものです。ただ、今違うところと言えば、今は、神に全き主導権があるということです。実に、自分自身が全く御手の中にあることを知り、感じることは、深い霊的な体験です。

十八年にわたる総長職を終えるにあたって、まず、そして何にもまして、主に感謝を捧げたいと思います。私に対する主の寛大さは限りないものでした。私としましては主の賜物はすべての会のためであると心得、一人ひとりのイエズス会員とわかち合えるように応えようとしてまいりました。これが、私のたゆまぬ努力でした。

この十八年間、私の一つの想いは、心を尽くして、終始、主と主の教会に仕えることでした。私は、会において目の当たりにしてきた大いなる進歩のゆえに、主に感謝いたします。明らかに、私自身をはじめとして、欠点もあつたでしょう。しかし、個人的な回心において、使徒的活動において、貧しい人々、難民への関心において、大いなる進歩があつたことは依然として事実です。特に、ここ数年、教会と教皇に対して示された忠実な、子としての従順な態度については、特別に言及しておか

※本書は、第9刷で暁道学長の巻頭言と、  
李中等教育担当理事の第V章を追加しました。

## 叡智を生きる

—他者のために、他者とともに

---

|            |          |
|------------|----------|
| 2010年8月21日 | 第1版第1刷発行 |
| 2011年3月24日 | 第2刷発行    |
| 2011年5月20日 | 第3刷発行    |
| 2012年3月30日 | 第4刷発行    |
| 2013年3月27日 | 第5刷発行    |
| 2014年3月28日 | 第6刷発行    |
| 2015年3月25日 | 第7刷発行    |
| 2016年3月25日 | 第8刷発行    |
| 2017年3月25日 | 第9刷発行    |
| 2018年4月1日  | 第10刷発行   |

編者：上智大学『叡智を生きる』刊行委員会

発行者：佐久間 勤

発行：Sophia University Press

上智大学出版

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

URL：<http://www.sophia.ac.jp/>

---

制作・発売 株式会社ぎょうせい

〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11

TEL 03-6892-6666 FAX 03-6892-6925

フリーコール 0120-953-431

〈検印省略〉 URL：<https://gyosei.jp>

---

©Ed. The Publication Committee of "An Unending  
Quest", Sophia University, 2010 Printed in Japan

印刷・製本 ぎょうせいデジタル㈱

ISBN978-4-324-09050-3

(5300144-00-000)

[略号：(上智) 叡智を生きる]

NDC 分類377.28

本書は、環境に配慮して、本文には再生紙を使用しています。